

こんなメールが届いた。

「私はおそらく作り手の方々があまり想像しないような使い方をしているのではないかなと思います。

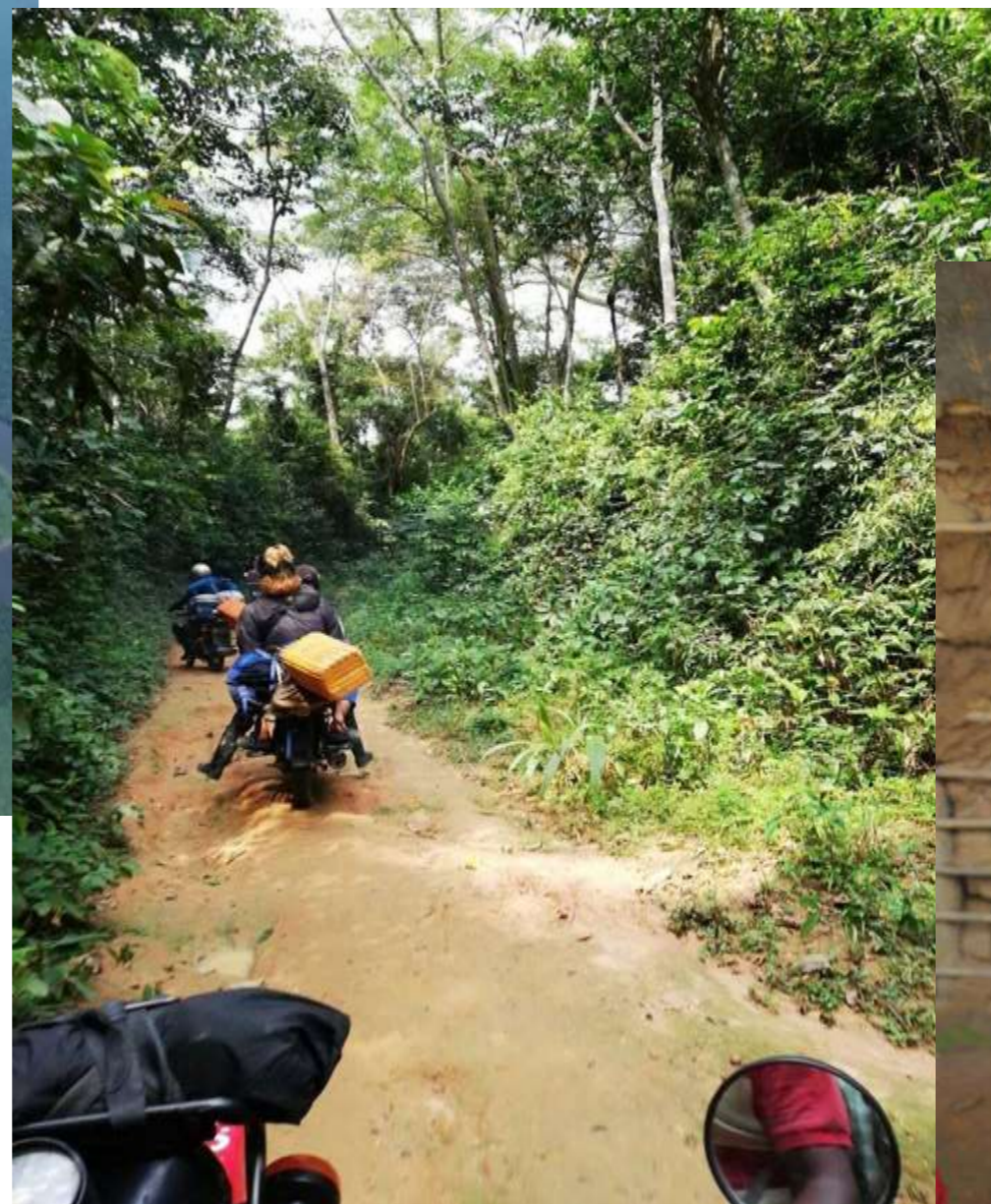
私はアフリカ、コンゴ民主共和国の熱帯雨林にあるワンバという村で、ボノボというチンパンジーに似た類人猿の研究をしています。2014年からフィールドブーツを愛用しています、ハードユーズに耐える丈夫さ、滑りにくさ、小さな川の本橋から落ちることが減りました……徳山奈帆子」

国立 総合研究大学院大学

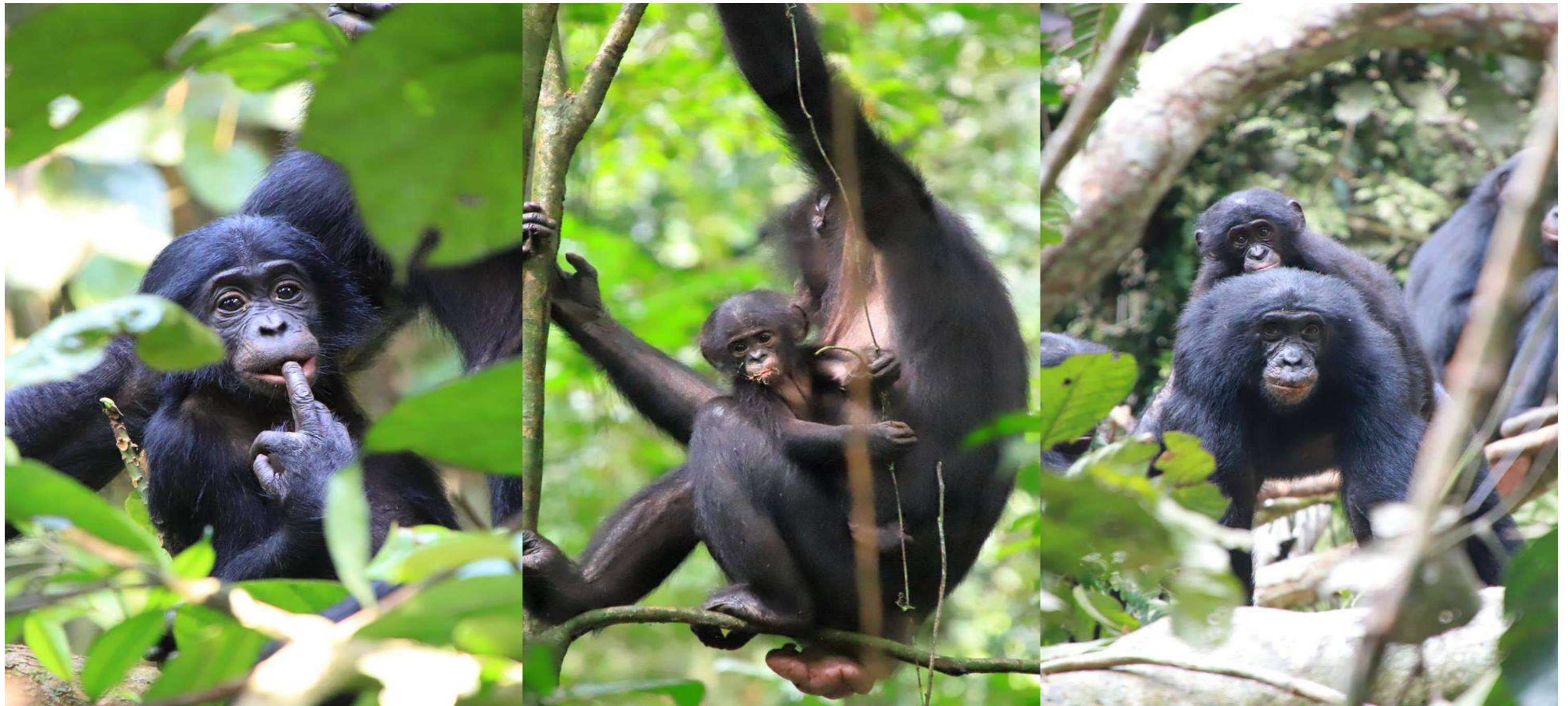
研究員 徳山奈帆子 さん

全ての画像は徳山奈帆子さんに提供頂きました

成田空港を飛び立ちエチオピアまで16時間のフライト。ここで乗り継ぎ
コンゴ民主共和国の首都キンシャサのヌジリ国際空港までは3時間のフ
ライト。今度はチャーターしたセスナ機でジョルという村まで4時間。



ここから先は四輪車も走れない道をバイクのバックシートに揺られてさらに4時間、ついにワンバ村に到着。日本から1万3千キロ、移動時間だけで27時間以上、途中物資の調達・現地機関への手続きなどなど1週間を超える旅になる。



ボノボはチンパンジーによく似た動物、というが初めて見る者にはチンパンジーと区別はつかない。外見はチンパンジーと比べるとスリムなだけ、しかしその生態は大きく違う。群れの行動を決定するのは体の大きなオスではなくメスのお母さん、起床から日中の食事探し、宿泊場所までメスが決めることが多い。オスがメスの意にそぐわないことでもしよものならメス全体から総攻撃となることもある。群れで暮らす他の動物と最も大きく違うのは群れ同士が敵対関係にないことだ。隣の群れの住人が紛れ込んでも争いが起こるのは稀で、訪れた隣人と食べ物を分け合うことも珍しくはない。チンパンジーなら殺し合いに発展する状況でも、身体を触れ合ってまるで隣人を歓迎するような行動をするのだとか。

1週間1万3千キロの旅をし、現代の日本人にはあまりにも不自由な生活をしながらでも野生のボノボを観察したくなるのは、人間や他の動物には見られない寛容さがもたらすものなのかもしれない。

徳山さんの朝はボノボよりも早い。ベースキャンプのワンバ村からボノボ達の暮らす森まではジャングルを1時間以上歩かなければならないからだ。夜明け前に村を出発し、ヘッドランプの明かりを頼りにジャングルを進み、群れの宿泊場所に到着して起床時間まで待機する。



日中は群れを構成する一人ひとりの行動を観察し誰が何をしたのかひたすらメモを取っていく。

観察は夕暮れになってボノボたちが10数メートルの樹上にベッドを作り始めるまで終わらない。



1日10時間、歩く距離は毎日15Km以上。毒蛇が潜んでいる赤道直下のジャングルで、半年にわたり調査する徳山さん。

彼女の足元を、雪と坂の街、北海道小樽で生まれたフィールドブーツ#1000がサポートさせて頂いている。